

LEE
李

SUN
善

HEE
姫

学 位 の 種 類 博 士（国際文化）

学 位 記 番 号 国博 第 52 号

学位授与年月日 平成17年 9 月 7 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研 究 科 ・ 専 攻 東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期 3 年の課程）
国際地域文化論専攻

学 位 論 文 題 目 日韓の巫俗文化と女性
－儀礼に現れた女性間関係と地域社会の分析から－

論 文 審 査 委 員 （主査）

教 授 瀬 川 昌 久

教 授 平 川 新

助教授 吉 田 栄 人

教 授 鈴 木 岩 弓（文学研究科）

論 文 内 容 の 要 旨

1. 問題関心と研究目的

韓国と日本にとって、巫俗は長い歴史の中で庶民と最も密接な関係をもちながら存続してきた民俗であり、宗教である。巫俗のあり方はその時代時代における人々の生活や思考によって変化してきた。筆者はその巫俗をテーマとし、韓国の社会と日本の社会を比較研究することによって両国の社会文化を深く理解することができると考えている。

しかし両国において巫俗がどんな機能を果たし、人々は巫俗を通して何を求め、何を反映しているのか、さらに巫者と社会との関係はどんなものであるのかなど、その比較は簡単な作業ではない。現在まで色々な民俗、あるいは文化人類学者がそれぞれ韓国と日本の巫俗について比較しているが、それは部分的、しかも現象的考察にすぎなかった。

筆者はここで、二つの社会には口寄せとクッという地域の共同体に関わる儀礼を執行する民間の

司祭巫が存在することに着目し、その司祭巫とそれに関わる人々の社会関係について、ごくローカルな視点から調査、分析を行なうことにする。ローカル研究の必要性は、両巫者の巫儀が地域社会と密接な関係を持ってきたことにある。今現在の巫俗は、単に個々人の依頼者のみを対象にして行なわれている場合が最も多い。しかし、2～30年の前の時代から考えると、巫俗は単なる個々人の信仰ではなく、地域の人々の間で共有されていた信仰だったのである。それにも関わらず、多くの研究者は巫者にのみ研究の焦点をおき、それを信仰してきた地域の人々については明確にしていなかった傾向があった。

本論文は、このような問題点から両国における巫俗文化の担い手について、巫者と地域民という二つの観点から考察を行なう。それにより、地域の中で巫俗文化がどのような意義を持ってきたのかを明らかにし、また巫俗文化の中に反映されている人々の関係や思考体系について明確にすることを目的とする。特にこの論文は、女性を中心に考察を行なっていることに意義がある。両国の巫俗文化は女性を主体として継承され、発展してきたことから、巫俗文化には日本と韓国の女性達の宗教観のみならず、人間関係や社会観なども反映していると言える。従って、巫俗文化の研究を通して両国の女性間関係のあり方を比較することは充分可能であると考えられる。

2. ロ寄せ巫女とタンゴル巫の性格

ロ寄せ巫者とタンゴル巫は成巫動機や過程において同一ではなく、また儀礼においても異なる。ロ寄せ巫女は直接憑依した状態の中で死者の言葉話すことでシャーマンの要素を持っているのに対し、世襲のタンゴル巫は神霊や死霊などと直接接触することはない。このことから、両巫者は異なるタイプの巫者であり、従ってその両者を比較すること自体に無理があるとされた。

しかし、筆者は両巫者が共に地域の女性達によって支えられ、特に個人的巫儀だけではなく、女性の集団的儀礼に関わってきたことに共通点を見出している。そこで地域の女性達の儀礼を執行してきた司祭巫という両巫者をとりあげ、彼らが行なう巫儀の内容にどのように地域の女性間関係が反映されているのか、またその差が意味するものは何なのかを考察することが可能になる。

筆者は本稿でシャーマニズム、あるいはシャーマンという言葉の代わりに巫俗文化、巫者という言葉を使っている。それは、日本と韓国において「シャーマニズム的慣行を伴う文化」がそれぞれ存在し、それを称する言葉として巫俗、あるいは巫という言葉が実際に使われていた事実をそのまま学問に反映するためである。また、巫俗という言葉をもつことで地域的多様性を認めながらその特徴を比較するという意図が実現できると思っているからである。

従って、本論文では比較しようとする両巫者がシャーマンなのか否かは最初から問題としないことを断っておく。むしろ、両巫者は共に伝承性（継承）を持っており、それ故伝統的社会と密接に関わっていたこと、また、その伝統的社会において両巫者が女性の儀礼の司祭者的役割を行ってき

たことに注目して、比較を行なう。

3. 先行研究と比較の視点

日韓巫俗に関する先行研究の蓄積は著しいものがある。日本の場合は、日本民俗学者たちによる口寄せ巫女のライフヒストリーとショウバイ内容に関する数多くの報告と同時に、日本のシャーマニズムの性格を規定するための宗教学的的研究が1960年代以降活発になされてきた。中でも桜井徳太郎は、それぞれの地域における巫女の成巫過程と巫儀の特徴を調査、記述している。そして、それらの事例をまとめたうえで日本のシャーマニズムに関する民俗学的、または宗教学的考察を行ってきた。しかし、これらの研究の重点は口寄せ巫女、そのものに置かれており、地域における口寄せ巫俗の機能や役割についての考察は充分ではなく、特に地域の人々にとっても口寄せ巫俗の意義を明確にするには限界があった。

そのような研究動向の中で、身体的に不自由な女性が一人前になるために口寄せ巫女の道を選択するしかなかったことを、地域の救済システムとして論じた川村邦光の研究や、下北半島のイタコ達が一年をかけて行なうショウバイ内容を詳細に記録した高松敬吉の研究、福島ワカが行なう死者の口寄せと村祈祷などの研究は地域という観点から行なわれた研究である。

ところが、1990年代に入ってから口寄せ巫俗に関する研究は停滞を見せており、これ以上の発展的議論は出ていないのが事実である。それは、恐らく口寄せ巫女そのものに重点を置いてきた口寄せ研究の限界とも言えよう。

一方、韓国の巫俗研究は日本植民地時代における秋葉隆の研究以降、多くの国文学者達による巫歌と叙事の採録が60年代と70年代にかけて活発に行なわれ、その内容分析から巫俗の原型や原理などが分析されてきた。その多くの言説は、巫俗文化を自主的な民族文化の原型、あるいは伝統と見なしている現在までの研究動向の中で美化され理想化してしまった問題点がある。しかし、このようなナショナリズム的研究の流れは批判されながらも、今でも韓国巫俗研究において主流を成しているのである。

韓国巫俗研究のもうひとつの大きな流れは、女性と巫俗に関する研究である。この研究は、儒教から排除されたものを包容している巫俗の姿を論じたL. ケンダルの研究と、男性中心の社会で周辺的存在であった女性達がみずから不安定的な立場を維持していくために、夫の兄弟の妻達（同婚）や同世代間の親戚達との「女の世界」を作り、助け合っていたと論じた重松真由美の研究が、最も実例に基づいたフィールド研究となっており、今でも多くの研究者に引用されている。しかし、その他の研究は概ね、厳しい現実の女性達が恨みを解き放す（崔古城）、あるいは女性を慰めて結果的に伝統的な社会生活の中に円滑に入っていくことを奨励する側面を持つ（丹羽泉など）などという見解を共有し、それ以降の研究成果が見られないのが現状である。

比較研究の必要性については、巫俗研究において新しい研究方法を提示するという狙いがある。日本と韓国における巫俗研究の蓄積は、著しいものがある。これほど沢山の研究者の関心分野であった巫俗研究は、日韓共に現在において停滞しているように見える。おそらく、口寄せ巫者やタンゴル巫と言った巫者の減少がその原因であるだろうが、研究の方向性に新しい展開がないということも巫俗研究の停滞を招いた大きい原因であろう。言い換えれば、巫者を対象にした研究はある程度やりつくされ、これ以上の研究成果を期待できなくなってしまったのだ。

このような状況の中で比較研究は、巫俗研究の新しい手法としてあげることができる。実際に何人かの研究者は比較研究を試みている。比較研究を行なう意義は、研究の対象としている文化の同質性と異質性をより明確にし、その差をそれぞれの社会において説明することであると言う。しかし、一つの現象に基づく比較は断片的、かつ表面的結論を見出すことしかできない。その差を明らかにするためにはより内面的分析が必要とされるのである。本論文ではそのために、以下①から③までの研究課題をそれぞれの章においてクリアにした上で、最後の結論として④の考察を行なう。

- ① 個人信仰ではなく、地域社会の文化としての巫俗の社会的機能について明らかにする。(1章、4章)
- ② 地域社会の社会成員がどのように巫俗文化を認識し、巫俗文化に関わってきたのかを考察し、巫俗儀礼に関わる社会関係について明らかにする。(2章、5章)
- ③ 巫俗文化に反映される女性文化について明らかにする。(3章、6章)
- ④ それぞれの巫俗儀礼が持つ構造的原理を探り、それが女性間関係とどのように結びついているのかを明らかにする。(結論)

4. 本論文の構成

本論文は構成上、二つの部に分けられている。前半の三つの章は日本の東北地方の口寄せの巫俗文化について考察を行い、後半の三つの章は韓国南部(世襲巫地域)を中心とする巫俗文化を中心に考察を行う。そして、結論では各章で紹介した事例や論点をベースに日韓の巫俗儀礼に現れる女性間関係を分析し、その構造的特徴を比較する。さらに、それが日本と韓国の女性達においてどのような意味を持つのかについて論じていく。

第1章 青森の口寄せ習俗と口寄せ巫女の宗教職能的機能

比較のために、まず、比較の対象とする日本の口寄せ巫女と韓国の「世襲司祭巫」とされるタンゴル巫を同一線上に置かなければならない。そこで第1章では、イタコ(青森地域の口寄せ巫女)の民間の司祭的な宗教職能的機能について明らかにする。東北日本の口寄せ巫女は、主に死者の口寄せを行う民間巫者としてのイメージが強く、そのことが口寄せ巫女の存在の意味を歪曲してしま

った傾向がある。口寄せ巫女は個人的依頼者による口寄せの他に、地域社会の中で女性集団が行なう儀礼の司祭的機能も持っていた。この事実を、特に東北の青森地域を中心に考察する。

青森地域の口寄せ巫女のショウバイには新口がないと言われ、殆どの口寄せが個人的な依頼や何人かの女性達による小規模な依頼で行なわれていたとされてきた。しかも、彼女らのショウバイがあまり自分の地域を基盤としていなかったこともあり、青森地域の口寄せ巫女は「アルキ巫女」などと呼ばれてきた。そのようなショウバイの形態が近代の変化の中で寺院の祭りで行われる「イタコ祭り」に出かけるという今最も一般的なショウバイの形態を生み出し、現在はこれらの商売が大きく注目されるようになっている。このような巫者のショウバイ形態から、多くの研究者はイタコという口寄せ巫女を単に目が不自由で死者のホトケをおろす宗教職能者としてきた傾向がある。しかし、各地域の郷土誌から採集された人々の言説には、ムラの儀礼を行なう巫者として口寄せ巫女を認識していたと見られる記述が沢山残っている。それらを分析し、さらに青森地域で聞き取り調査をした内容を加えて考えると、青森の地域民が考えていたイタコは単に目が見えなくて、ホトケの口寄せをしてくれる存在ではなかったことが明らかである。さらに弘前地域ではムラの女性達のみで行なわれる春祈禱をイタコアソバセと呼んでいたことから、イタコという口寄せ巫女は女性達の共同体儀礼を執行してきた担い手であったということが言える。

第2章 地域定住型の口寄せ習俗と地域の人々 ― 宮城県登米郡中田町の事例を中心に

2章では青森地域とは違って、口寄せ巫女が地域の中の巫として定住し、商売をおこなってきた宮城県北部の地域を事例に、死者を降ろして語らせる口寄せという民間信仰が地域の中でどのように成り立ち、それがどのように支えられてきたのかを明らかにする。特に、地域住民側からの聞き取り調査の内容を通して、近現代の当地域における口寄せの様子や、彼らが抱いていた口寄せ習俗に関する認識、さらにはその衰退過程について考察を行うという、従来の巫俗研究とは異なる研究方法を試みている。当該地域の口寄せは口寄せ巫女の師弟関係からみても、口寄せを依頼する地域民の巫女選定の範囲においても非常に地域に密着していたことが指摘できる。そのような地域性の中で、地域住民が抱いていた口寄せ巫女と口寄せ巫俗に対するイメージはどのようなものであったか、そして、その習俗はいつまで地域の中で続いていたのかを住民側からの聞き取り調査で明らかにした。その結果、地域において口寄せ巫女は神秘的でカリスマ的な存在ではなく、日常においては殆ど他の人々と同じような生活し、親密な関係であったことがわかった。また、当地域の口寄せは、古口と新口とがあり、古口に参加する女性達の関係は地縁や個人関係に基づいていて、新口の場合は「シンルイ」関係が中心となっていたことが新たにわかってきた。それぞれの口寄せには参加する人々の関係が異なっており、異なる社会関係によって口寄せは支えられてきたのである。

第3章 口寄せ習俗と女性間関係 ― 口寄せ衰退の過程をめぐって

3章では、前章で明らかにした当地域の口寄せ習俗を支えてきた地域の社会関係を特に女性達の観点からとらえ直し、地域内での女性間関係が口寄せ習俗の継承システムの中でどのように働いてきたかを明確にしている。今までの研究では口寄せという巫俗文化から地域の社会関係を考察したものは数少なく、女性との関係について書かれたものは殆どない。この章では口寄せにおけるイトクチという進行役の役割について着目している。イトクチは年配の女性達が主に勤めていたが、この進行役は巫女が口寄せをする手助けをするだけでなく、口寄せに経験が少ない若い女性達が口寄せの儀礼に入り込みやすいように、巫女の口寄せの内容を通訳し、代わりにトイクチをかけるなどの役割をしていたと思われる。このような年配女性と若い主婦達の間でのつながり、即ち世代間の秩序を守ろうとしていた当時の女性間関係こそが口寄せの継承メカニズムだったのである。

この女性間関係と口寄せ巫俗の相関関係をより明確にするため、当地域の中で口寄せ巫俗の衰退が著しかった昭和の40年代前後において、地域の女性間関係がどのように変化したのかを当時の婦人会の会報の内容を用いて考察した。その内容は、1) 自分達が最初に婦人会に入った時の喜びに比べて、今の若い女性は婦人会に入ろうとしていないことに対する憂慮について、2) 高度成長期という新しい時代において家族観や女性の役割が変化していること、3) 難しくなる家族間の問題などの記事が多く書かれていた。そこから、当時の年配女性達は若い女性達の変化を心配しながらも、受け入れるしかないと判断し、かえって自分達が何より時代に取り残されて、若い人たちに嫌われるのを恐れていたことがわかる。さらに、時代や若い人達の考え方の変化に対して従来の考え方や価値観を押し付けることなく、むしろ新時代の教養を学び、自分たちが変わることを選択していたことが明らかになる。このような中で世代における女性間関係には乖離が生じていたことは言うまでもない。口寄せという習俗が女性達の世代秩序の中で継承されてきたことを考えると、この時期に口寄せが著しく衰退したことはある意味で当たり前だったのかも知れない。

以上の分析結果から、当該地域における口寄せ巫俗が女性達の世代間における秩序から継承されてきたことと、その女性間関係の崩壊と共に衰退してしまったことを検証した。

第4章 韓国西南部珍島の巫俗文化と現代の変容 ― 地域民の情緒をめぐって

韓国珍島における巫俗文化を概括すると共に、現在の変化として起こっている巫者の混在とそれに現れる地域民の情緒について考察する。また、巫俗儀礼に表現される祖先の姿を描き出すことで、当該地域の巫俗文化の特徴を分析することを試みる。

珍島はそもそもタンゴルと呼ばれる世襲巫がクツという巫儀を行う地域である。韓国中部地域において巫儀の主要な担い手として活動をしている降神巫は、この地域では巫儀を行うことができず、占いを専門とする補助的機能を担ってきた。それは、珍島の巫儀が洗練された芸術性を持ち、かつ

て世襲巫達によって専門化されてきたことに起因する。しかし、だからと言って世襲巫達の専門性が地域社会の中で認められ、高く評価されてきたわけではない。身分的には最下位の賤民とされてきた彼らは、近現代に入って身分を隠し、地域を離れ、巫者としての職業を捨てた。それにより、各地で世襲巫の数は急激に減り、その穴を埋めたのが降神巫達であった。それまで出来なかった巫儀を行うようになったのである。このような降神巫の増加は、韓国において全国的傾向であるといえる。降神巫達は、世襲巫達が守ってきた伝統的で洗練された儀礼を真似した形でクッを行なっているが、長い間学習を積んできた世襲巫の儀礼を全部覚えることは非常に難しい。さらに、シッキムクッなど世襲巫の巫儀の大半が無形文化財として登録されるようになってからは、保存会などの組織的指導を受けなければならなくなり、シッキムクッの伝授を途中であきらめる巫者も多い。多くの降神巫は世襲巫の儀礼内容に、死者の口寄せを添加することで差別化をはかっているのである。しかしながら、その口寄せで現れる祖先は他地域で見られるような、わがままで自由奔放な祖先の姿ではない。周りに遠慮しながら、気を使っている祖先の姿を通して、珍島の閉鎖的地域性と近代の苦難に満ちた歴史、そしてシッキムクッの節制された美学の意義を読みとることができるのである。

第5章 巫俗儀礼にみられる「ウリ（ウチ）」と「ナム（ソト）」の人間関係 — 「クッの共同体性」の実体をめぐって

この章では巫俗研究の中でよく言われている「クッの共同体」を実際の珍島のシッキムクッの事例から再検討し、クッの儀礼に参加する人々の関係について考える。韓国の巫俗儀礼の多くは公開された上で行われるのが一般的で、巫俗儀礼には儀礼を委ねた人や家族だけではなく、同心円状に広がる親戚や村人が参加し、ましては無関係者や地域の下層民までを排斥しないで受け入れていたという姿勢が見られる。これは儒教的儀礼が父系血縁共同体を中心に行なわれて、それ以外との関係を明確に区分していたことと対称的であると言える。このような巫俗儀礼の開放性は多くの韓国研究者たちによって「クッの共同体性」として評価されてきた。

しかし、その「クッの共同体性」を主張する多くの研究は、巫歌の内容や巫儀の内容のように巫者達の言説により、または儀礼の表面的かつ歴史的に言われてきたことを、現代における検証なしにそのまま受け入れているきらいがある。実際のクッの現場でそれぞれの参加者達は本当に「共同体性」を感じ取っているのか。人々はクッの儀礼の中でどのように「共同体性」として一体化するのだろうか。本章では、この疑問を解決するために、一つの儀礼に参加する参加者の性格とその役割、及び彼らの行動を分析した。珍島で行われた五つのシッキムクッの事例からクッに参加した人々をそのそれぞれの役割と期待を中心にいくつかの参加者レベルを分類し、それぞれのカテゴリの人々の行動を整理した。

その結果、シッキムクッの儀礼の中で参加者はそれぞれ違う立場を持ち、各 status によって地域社会で求められる役割の期待が異なっていることを指摘しなければならない。さらにそのような status の期待からクッの中に「ウチ」と「ソト」の区別が発生していると言えよう。また、この「ウチ」と「ソト」の境界線の中では婿や親族の立場も微妙であることが指摘できる。彼等は時には「ウチ」の人間として、また時には「ソト」の人間として機能していると言える。

本章ではこのような分析結果を通して、韓国巫俗に現れる「共同体性」は参加者全員の一致と一体化を求めるものではなく、共同体を枠組みする「ウチ」と「ソト」の境界線も曖昧であることを論じている。

第6章 巫俗文化と女性、そして「チプ（家）」に対する再考察 — 韓国全羅南道珍島と済州島の事例を中心に

本章では、これらの女性と巫俗について乱舞している言説を整理し、その問題点を提議する。また、その問題点を珍島と済州島で行なわれる巫俗文化から再考察し、韓国巫俗に現れる女性の姿について考えなおす。

巫俗文化と女性は、今まで多くの研究者達の関心分野でありながらもまとまった議論にならなかったのが現状である。最も一般的な解釈としては不平等的社会関係の中で女性が抱いてきた恨（ハン）の気持ちを解き放つのがクッであり、女性達はクッを通して不調和的な社会関係の中で生じる葛藤の気持ちを解放し、調和を取り戻し、再び日常に戻るとの見解である。多くの研究者から言われてきた調和と融合の巫俗の原理が、ここでもまた解釈の中心になっていることがわかる。一方、巫俗に現れる女性の社会観について様々な見解が存在する。L. ケンダルは、クッに現れる韓国女性の関心が家族全員と共同体全体にまで拡大されると言っているが、任敦姫は子宮家族観を持つ韓国女性は婚家の祖先をわがままで否定的な存在と見ていて、クッにはそのような祖先の姿が見られると述べている。金眞明は巫俗の抵抗的性向については間接的に認められるとしながらも、そこに現れるのは既存の男性中心の支配イデオロギーから大きく離脱したものではなく、付属していると論じている。

このように錯綜している巫俗と女性の論理が、実際の巫俗の中でどのように表出されているのかについて珍島と済州島の事例を中心に考察を行なった。その結論、現在の珍島や済州島の巫俗文化の多くの面には、韓国社会における「チプ（家）」文化が再生産されていて、女性達もそこから完全に自由ではないということがわかった。それは、女性達自らの価値観の基準として「チプ」が存在すると共に、巫俗文化の制度的な面でまだ家父長的思考方が根強く残っているからである。

本研究は、巫俗の中で社会制度的なもの（「チプ（家）」文化）がどのように再生産されているのかを検討することで、理想的な巫俗文化の原理と現実的な巫俗文化の差を論じた。これは今まで韓

国国内で過大評価されてきた「巫俗文化」の限界性を提示すると共に、女性たちにとっての「チプ(家)」の意味についての考察でもある。

結論 巫俗儀礼の構造的原理と日韓の女性間関係

今までローカルに調査・分析してきたそれぞれの内容を、日韓の比較研究としてとらえ直す。比較の中心テーマは巫俗文化からみえる日韓の女性間関係である。両国において巫俗は「女の文化」とされてきた共通点がある。その「女の文化」に反映される女性間関係の差に焦点を置き、その差異から日韓の女性が巫俗に表していた共同体性について考える。

結論では前の章で紹介した口寄せとシッキムクッの事例をその儀礼内容と参加者の役割と期待という面から分析しなおすことで、その構造的特徴を明確にした。その結果、日本の口寄せに現れる女性間関係は一元化を求めるものであり、タテとヨコという二元的な女性間関係が同時に同じ儀礼の中で現れる例は殆どない。新口はタテ関係の中で、古口はヨコ関係の中で行なわれるのは普通であり、地域によってヨコの関係のみの口寄せ（古口と村の春祈祷）が継承されてきた地域と口寄せがそれぞれのタテとヨコの関係の中で同時に展開されてきた地域があるということができる。これは中根千枝が強調している場という枠を重要視する日本人の特徴と一致し、それぞれの女性達の枠の中で口寄せ巫女の儀礼が行われていたことを意味する。そして、このような日本の一元的巫俗の構造は、儀礼の中に参加している参加者全員に対して同じ権利と同じ目的を与えることで、同じ「ウチ」として受け入れていると言える。女性の巫俗文化に現れる人間関係は同じ目的を共有するという「ウチ」の論理の方が強く働いていると言える。

反面、韓国の巫俗儀礼の場合は、儀礼のメインはあくまでもクッを主催する女性と死者になるが、社会制度上の慣習としてタテの女性間関係の参与が見られ、さらに女性自身を取り巻く地域のヨコ関係の参加も見られる。この関係は同じ儀礼の中で重層的に現われ、それぞれの関係が儀礼を通して一体化するのではなく、ヨコ関係がタテ関係に対して牽制的役割を果たしていると言えよう。そして、その真ん中には女性の「自分」が中心となっている。

そして、重層的に絡み合っている人間関係を筆者はあえてそれぞれの機能的部分を強調せずに、そのままの現象としてとらえることで、その重層性自体が韓国の女性達が考えていたクッの共同体性であるとした。つまり、韓国の巫俗における共同体性は「自分」を中心に「チプ」の人間関係と地域の仲間関係が確実な境界線を持たずに広がっていく。そこには「チプ」の人間関係にのみに依存することもなければ、それを否定的にみることもない。地域の仲間関係においてもそれは同様である。一つ一つの社会関係をそれぞれ別な「ウチ」としている日本の巫俗の場合とは異なり、韓国の巫俗には自分を中心に、時と場合によって「ウチ」にもなり「ソト」にもなりつつ広がってゆく人間関係を持っており、それがクッの現場で重層的に見えてくるのである。

本論文は、今までの巫俗研究の中では殆ど行なわれることがなかった参加者達の社会関係、特に女性間関係を分析の対象にしていることで、従来の研究では言及されていなかった日本の口寄せの一元的结构と韓国クッの重層的構造を新たに提示することができた。さらにそれを日韓の巫俗に反映されていた女性たちの共同体性として解釈した。それは、比較という新しい研究方法の中で実現できたと思われる。本論文の意義はその分析内容のみではなく、文化人類学における比較の手法とその有効性を提示したことにもある、と考える。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本の東北地方の巫俗と、韓国南西部珍島の巫俗の实地調査資料を題材とし、相互の比較の視点を通じて、それらの儀礼に反映された背後の社会関係、特に地域の女性間にみられる社会関係の特色を明らかにしようとしたものである。

従来の巫俗研究はともすると儀礼の内容や巫者の人生史に集中する便向があり、地域社会との繋がりに目を向けた研究も、巫者と依頼者の社会関係に限定されがちであった。それに対し、著者は巫俗を支えてきた依頼者側の家族・親族・近隣住民相互間の社会関係を広く考察の対象とすることにより、その中で巫俗が果たしてきた社会的機能や近年の衰退理由などを解明することに取り組み、それらについての新たな知見をもたらしている。また、こうした視座を確立するに至った背景には、これまでの日本における巫俗研究の研究史についての批判的整理と理解があり、それらの点は一定の評価に値する。

日本においても韓国においても、巫俗儀礼の中で巫者、依頼者、一般参加者等主要な役割を演じるのが女性であることから、巫俗儀礼を通じて両社会各々の女性間の社会関係の特色を明らかにしようとする意図にはオリジナリティーが認められる。フィールド調査期間は比較的短期間にとどまっており、必ずしもインテンシブな調査とは言えないが、既存の調査報告資料と組み合わせるなど、その点の限界を補う工夫がそれなりに払われている。

日本と韓国の巫俗の比較研究については、およそ比較研究一般に共通する一種の困難さが存在し、比較対象とする儀礼の単位設定や記述の方法、比較データの時代設定等において、本研究も若干の課題を残した。しかしながら、韓国珍島のクッ儀礼における参加女性の社会関係の多元性（＝最終章第3節）など、個々の社会の分析のみからは必ずしも明確にできなかったであろういくつかの点について、著者は比較を通じて独自の見解を得るに至っている。日本語表現に関しては、一部に不自然な表現が残存している点が惜しまれるが、全体としては学術論文として十分な水準にあると認められる。

このように細かな不足点はあるものの、上述の諸評価点は著者が自立して研究活動を行うに必要な

な高度の研究能力と学識を有することを十分に示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認めるものである。